

JDDW 2023 メディカルスタッフプログラム

メディカルスタッフプログラム 1

「病病連携・病診連携における現状と展望ーメディカルスタッフの役割ー」 **公募のみ**

11月3日（金）9：00-12：00 （第13会場）

司会：吉治 仁志（奈良県立医大・消化器・代謝内科）

児玉 裕三（神戸大大学院・消化器内科学）

川口 巧（久留米大・消化器内科）

【司会の言葉】

病院完結型であった日本の医療は、高齢化社会・地域医療構想などの社会変化に伴い地域完結型医療へと変化しておりメディカルスタッフの役割が重要となっている。地域完結型医療の更なる推進には地域の医療機関同士のシームレスな連携が鍵となる。消化器疾患における連携例として、消化器がんを含む様々な消化器疾患の連携パスがある。また、近年、膵がんの早期発見を目指した取り組みも報告されている。さらに、NAFLDにおいては、かかりつけ医から専門医への紹介基準も提唱されている。今後は、インターネットを利用した医療情報共有システム、オンライン診療、介護との連携など更なる発展が期待される。加えて、2022年度より逆紹介率によるDPC算定基準も改訂されており病病・病診連携は地域医療においてますます重要な課題となっている。本セッションでは、メディカルスタッフの方々より、各地域の病病・病診連携の現状についてご発表頂きたい。その上で、現在の問題点を共有するとともに、今後の展望について議論したい。

メディカルスタッフプログラム 2

「緩和医療・ケアにおける多職種連携」 **公募・一部指定**

11月4日（土）14：00-17：00 （第13会場）

司会：三宅 智（土浦協同病院・緩和ケアセンター・緩和ケア科）

本松 裕子（東京医歯大病院・看護部）

【司会の言葉】

2007年に施行されたがん対策基本法によって、全国にがん診療連携拠点病院が整備され、認定要件の一つとして、緩和ケアチームの設置が義務付けられた。その後のがん対策推進基本計画においても、当初はがん治療の早期からとされた介入の時期が、がんの診断時と改変され、がん治療の全期間にわたって、緩和ケアが必要であることが強調された。その後、早期からの緩和ケアの介入が、がん患者の生命予後を改善するという報告もなされている。本来、緩和ケアはがん診療においてのみ提供されるものではないが、近年では、診療報酬上も心不全の緩和ケアについても診療加算が算定できるようになり、名実ともに、緩和ケアは、がんのみならず生命を脅かす疾患すべてに対して必要とされるようになってきた。本プログラムでは、このように守備範囲がますます広がった緩和医療・ケアの提供体制について、異なる立場からの意見を共有し、多職種による効果的な連携について議論を深めたい。